

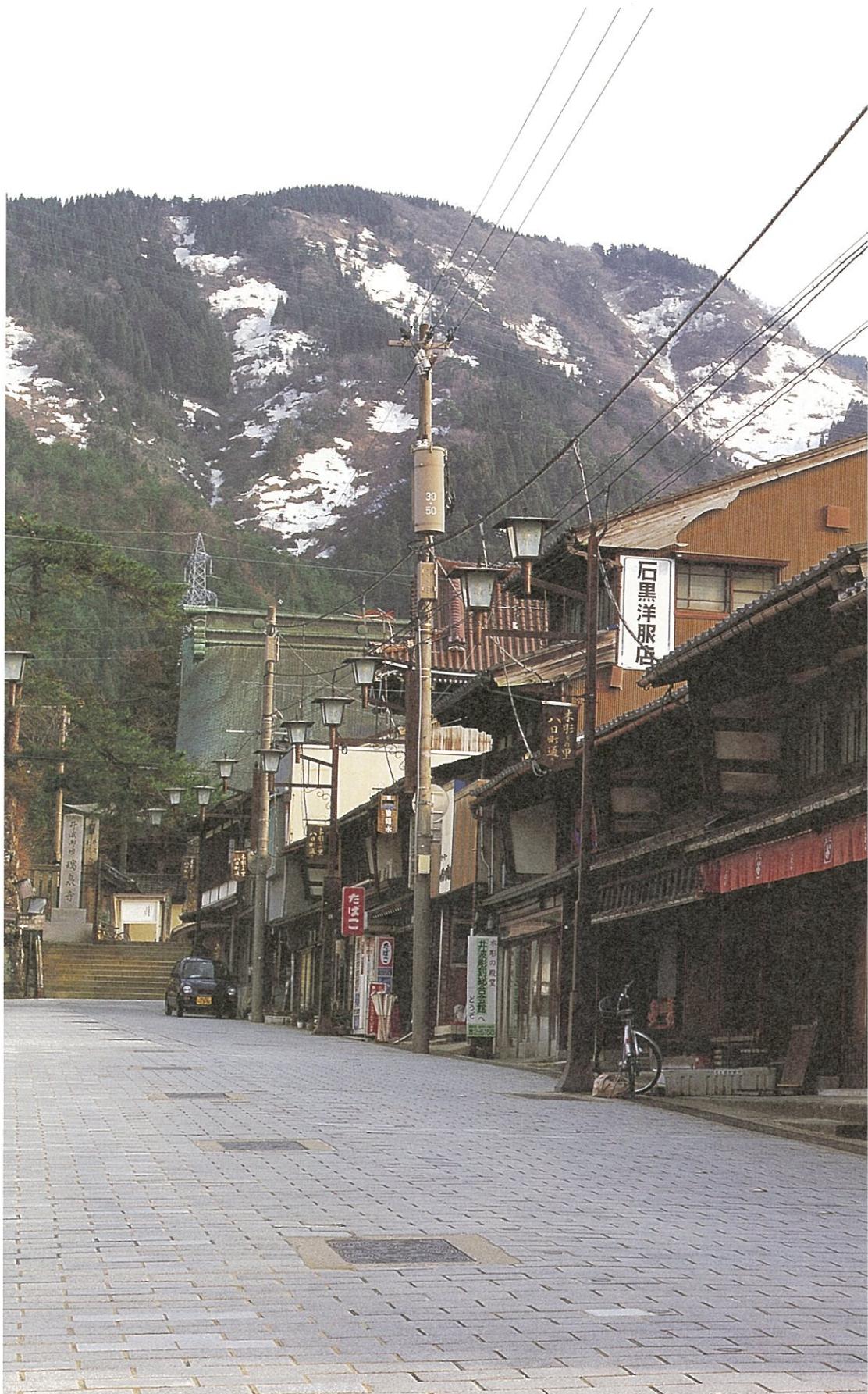
木彫刻に生きる門前町 【井波町八日町通り】

八日町通りは、瑞泉寺の門前町としての形態を基盤としながら市場町として発展した町なみである。かつては道の中央に用水が流れている。

木彫工房や商店などが建ち並ぶ通りはゆるやかな坂道で、そのため建物の軒が少しずつずれることになり、それが独特の景観を創出している。

また、隣境の隙間空間を階段や物入れ、床の間などにして互いに利用しあうという大らかで珍しいコミュニティをつくり出している。左右どちらかの端には大戸が付き、表から奥まで突き抜ける通り土間がある。通り土間に面したオイは小屋裏を見せた豪壮な吹き抜け空間になっている。

大正期の大火にも残った同町の町なみは、あまり改変を受けずに保存されたもので、特に木彫という伝統工芸に深く根ざした町として見るべきものが多い。宮大工たちの遺産が現代に息づく町なみである。





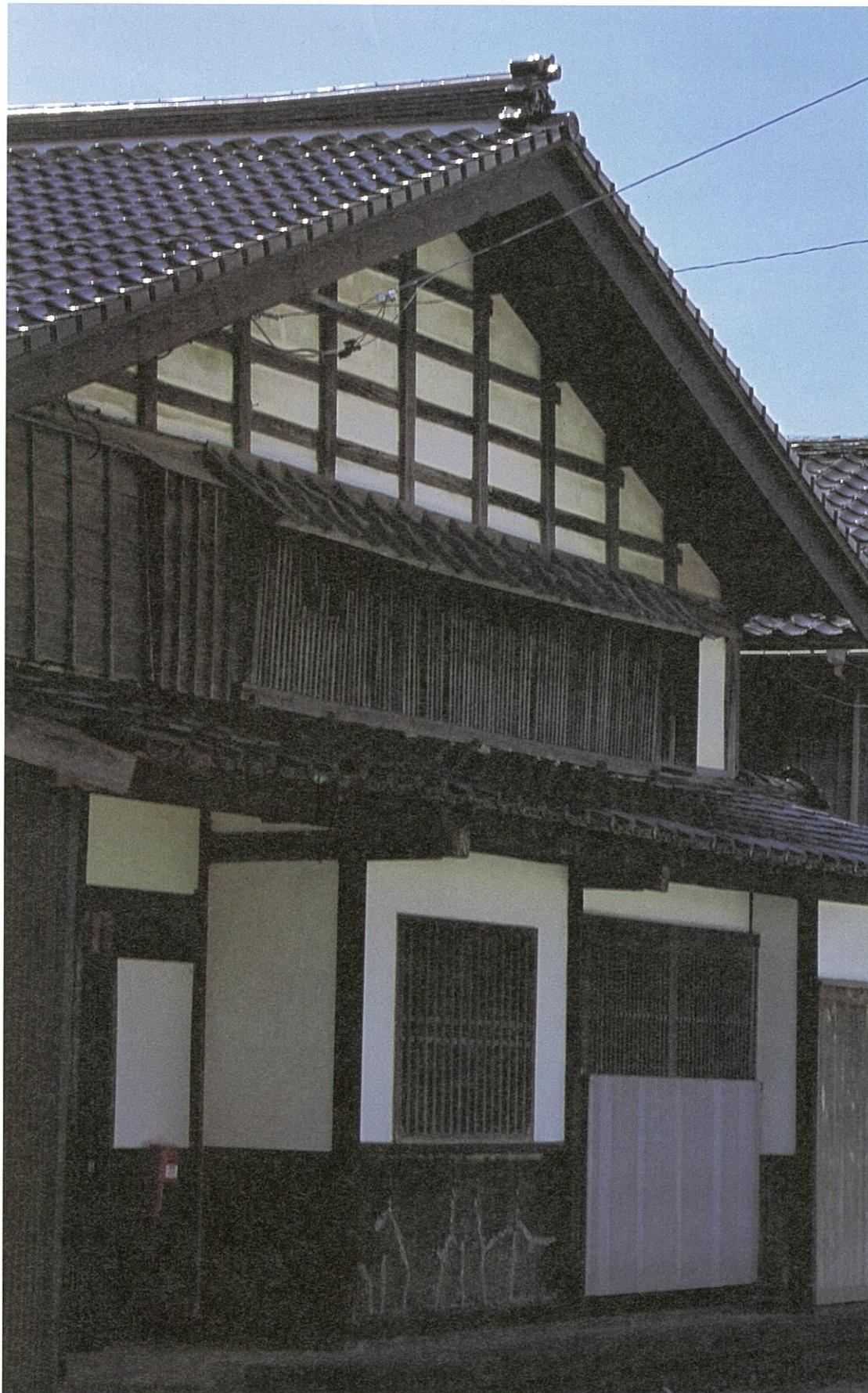
妻入りが連なる町なみ 【朝日町境】

朝日町は県の東端、県境に位置し、古来より北陸最大の親不知を控え、山が海に迫る要害の地であった。この地には越中・越後の国境として関所が置かれ、町なみは道路に面して切妻屋根・妻入りの民家が建ち並んだものであった。

かつて、屋根は石置き屋根で、それは海からの強風に対して考え出されたものであった。間口を梁間にとるより、軒高を極力低くした切妻屋根をつくることで、屋根面への風の抵抗を少なくなるため、葺き材などが飛ばされにくくなるためである。

間取りは、玄関を入ると土間で、その後に広間、奥の左側に寝室を配している。これは新川地方平野部の広間型を基本としたもので、縦に配して入口を妻側に取つたものである。

県東部下新川地方の泊・入善・魚津・三日市などは道路に妻側を見せた商家が多いが、これは朝日町の宮崎・境の街村(かいそん)に見られる広間型妻入り民家の形式が発展したものである。



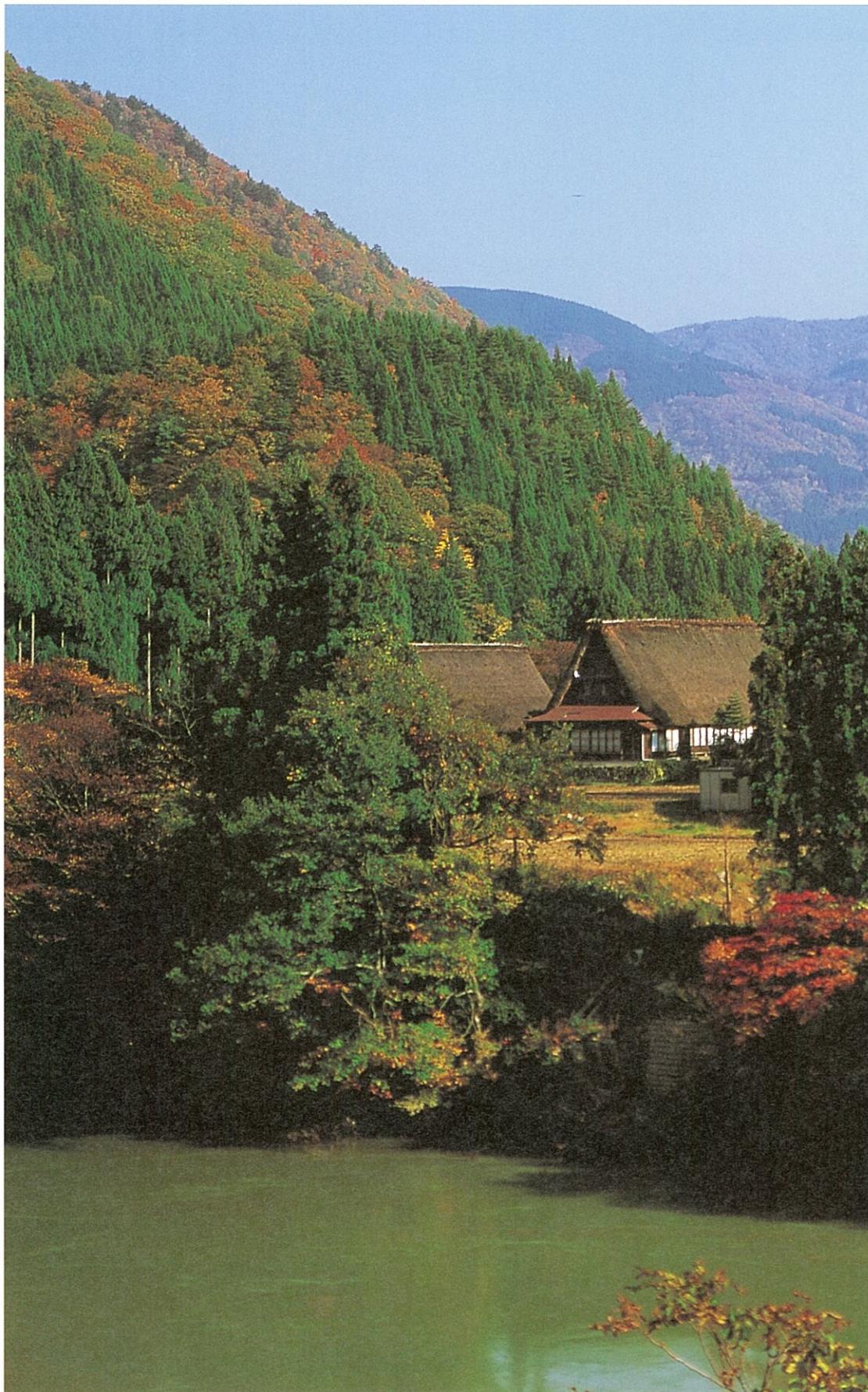


世界遺産になった民家 【五箇山菅沼集落】

五箇山（菅沼集落・相倉集落）と白川郷の合掌集落が「世界遺産」に登録された。なかでも菅沼は深い渓谷を刻む庄川上流に位置し、川が蛇行して舌状に突出したわずかな河岸段丘に集落を形成している。

菅沼集落の背後の急斜面にはブナやトチなどの大木が生い茂り、雪持林として雪崩防止のために伐採が禁止されている。この林の中に集落へつづら折れでに入る幅1mに満たない旧道があり、道を下り終えた所に清水岩と呼ばれる大石があつて貴重な湧水源として利用されてきた。

集落の景観は一見すると自然のままのように思われるが、暮らしつと深く結びついて守り育まれ、あるいは創られてきた。集落内の住居は、この地方独特の茅葺き合掌造り家屋であるが、類焼を防ぐため主屋から離れた場所に土蔵や板蔵を建てている。また、敷地が狭いため塀や生け垣などは見られない。これらの特異な建築群は、雪深い気候風土に根ざして完成されたもので、周囲の自然環境と一体化してより魅力的なものとなっており、日本の他の農村景観とは際立つた違いを見せている。





散居する民家と屋敷林 【砺波市】

屋敷林は、かつて囲炉裏の燃料や防風のほか、日常生活の多方面にわたって様々な機能を持ち、自然と調和した農村文化を育んできた。富山平野に散らばる緑の空間として、潤いの田園景観を見事に演出している。

屋敷林の樹木は、防風にスギを植え、ケヤキなどの広葉樹が彩りを添えるというもので、花樹や果樹、竹林など目的に合った樹種が選ばれている。

切妻屋根で妻入りの大きなアツマダチ民家と調和し、農村景観としては際立った美景を創出している。ちなみに「散居」景観は県内全域で見られるもので、富山県の文化遺産でもある。

